

挨拶

尾 池 和 夫 (京都大学総長)

(尾池) 京都大学の尾池です。たくさんの皆さんにご参加いただき、ありがとうございます。最初に少しだけご挨拶を申し上げたいと思います。大学教育改革フォーラムも今年で10回という節目を迎えました。今、司会のかたからありましたようなタイトルがついています。第1回は、「日本の大学をどうするか」というタイトルで議論が始まりましたが、私には非常に強い印象が残っています。「大学をどうするか？そんなのかつてにしてくれ」という印象を受けたのですが、一体この議論はどうなるのだろうかと思えるようなタイトルから始まったわけです。10回を迎えて、一つの節目であると思ってもよいのではないかという気がします。

今日は、この新しく改装した百周年記念の時計台を使っていただきます。この向こう側の建物も、もう一つの集まりでお使いいただいています。フォーラムにこの時計台を使っていただくことを、大変うれしく思います。この時計台は地下に、ブリヂストンタイヤの大きなゴムの免震装置が80機入っています。法人化を迎えるに当たって、震度7の激震が来てもびくともしないようにという趣旨で、お金をかけて導入しました。それをお使いいただくというので、これも何かのご縁かとうれしく思います。

多くのかたがたがご参加されているようです。先ほど人数のご紹介がありました。文字どおり南は沖縄から北は北海道まで、本当に広い範囲からたくさんのかたに集まっていただき、全国の国公立大学から満遍なくお集まりのようには拝見しました。うれしい限りです。

このフォーラムも最初は「日本の大学をどうするか」というタイトルで始まったわけですが、だんだんと教育改革の中身にかかわる実質的な話へと進んできました。昨年は、大学教育改革を行うための前提である大学経営の問題、「教育改革と経営改善」というタイトルがついていました。なかなか本質的なところまで来たのではないかと思います。今年は **Center Of Learning** をテーマにすると伺っています。どんどん具体的な話に入ってきて、しっかりした議論が続いているという印象を、私も受けています。プログラムを拝見しましたが、ブームのような議論が一時あちこちで聞こえたという印象を持っていますが、そのようなものから抜け出して、地道で日常的な活動となってきたと思います。教育改革というキーワードを、自分自身の改革の原動力に使うということが見えてきたと思います。大変望ましいことではないでしょうか。

京都大学においても、教育改革の努力が日常化してきたとやっと思えるようになりました。各研究会のレベルでも、教育の問題を具体的に議論する風潮が見えるようになってきたと思っています。この主催の看板にあるように、高等教育研究開発推進センター、それから大学全体の教育を考える高等教育研究開発推進機構が立ち上がり、今年度の4月1日からその仕事を始めました。現在、丸山正樹先生が機構長になっています。

京都大学も4月1日から、国立大学法人京都大学が法律で設置されました。国立大学法人京都大学が直ちに京都大学を設置するという法律になっていますから、4月1日から、また同じように京都大学というものがあるわけですが、設置形態が変わるわけです。運営の形態も変わり、理事会という役員会を中心に物事が決まっていくことになります。その中で、この高等教育研究開発推進機構の機構長である丸山先生には、京都大学の副学長をお願いする心づもりです。しっかりした強い機構のもとに、大学の教育というものを考えていこうと思っています。

このフォーラムの基調講演は、国際基督教大学学長の絹川正吉先生にお願いしました。本当にお忙しい中を来ていただき、ありがとうございました。それから話題の提供は、本学の林教授、熊本学園大学教授の遠藤隆久先生、名古屋大学の助教授である近田政博先生にお願いしました。指定討論は慶應義塾大学教授の井下理先生にお願いしています。皆様がた、本当にご多忙のところお引き受けいただきありがとうございます。これから講演、討論が始まりますが、どうぞ実りの多い成果をお持ち帰りいただきますようお願いして、私のご挨拶といたします。

今日は本当にたくさんのかたに参加していただき、ありがとうございました。

(松下) 尾池総長、ありがとうございました。続きまして、本センターの田中毎実が今回のフォーラムの主旨についてご説明いたします。